MEIJIMURA

Vol.93 2018 Autumn

明治村だより

Contents

鉄道寮新橋工場・機械館内常設展示リニューアル
特集 活版印刷と石版印刷について ……2
明治村写真コンテスト 紙上展覧会 ……4
秋の催しもの ……6
明治村ドラマロケ地MAP ……8
A La Meiji-mura ……9
語り継ぐ建築 人物編 …… 11
MEIJIMURA TOPICS …… 裏表紙

M E I J I M U R A　T O P I C S

明治村の資料が出張します！

展覧会名 特別展
「東京150年―都市とたてもの、ひと」

会場：江戸東京たてもの園
会期：7月24日（火）～2019年1月20日（日）
鹿鳴館で使用された桜花蒔絵小椅子、帝国ホテルライト館で使用されたピーコック・チェアやテーブルなどが出品されています。

ピーコック・チェア

展覧会名 明治維新150年記念特別展
「明治日本が見た世界 ~巨大壁画でたどる日本開国史~」

会場:明治神宮外苑 聖徳記念絵画館
会期:10月6日（土）～11月11日（日）
会場内に、明治村の出張展示コーナーが設置されます。明治村に関する情報が紹介されるほか、館蔵の宮廷家具・調度類や明治村が製作した人形劇映画「明治はる あき」に使用された、糸あやつり人形などが出品されます。

「明治はる あき」のワンシーン

博物館明治村　協賛会員　募集案内

博物館明治村では、歴史的建造物の修繕や展示など村内整備の充実を図るため広く皆様のご支援を募っています。

1. 法人会員の種類と会費（各1口あたり、消費税込）
- ○一般会員　10万円
- ○ゴールド会員　100万円

2. 会費の使途
明治村で展示・保存されている建造物の修繕や、村内の整備など公益目的事業費に充てさせていただきます。

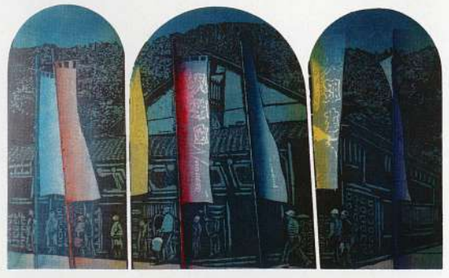
3. 会員期間
入会日より1年間
（入会月の翌年当月末日まで）

4. 会員の特典
- ○会員証（記名式）の発行
- ○招待券の贈呈
- ○刊行物等の贈呈
- ○芳名の掲示
- ○法人名の銘板付きベンチの設置（ゴールド会員のみ）

5. 問い合わせ先
公益財団法人明治村　協賛担当
住所：〒484-0000
愛知県犬山市字内山1番地
TEL：0568-67-0314
E-mail：meiji-info@nrr.meitetsu.co.jp

協賛会員（平成30年8月15日現在）　敬称略：五十音順

株式会社アイチケン	アサヒ飲料株式会社	アサヒビール株式会社	伊藤忠商事株式会社
株式会社魚津社寺工務店	株式会社NTTファシリティーズ	鹿島建設株式会社	キリンビール株式会社
サッポロビール株式会社	サントリーコーポレートビジネス株式会社	ソフトバンク株式会社	大日本印刷株式会社
株式会社竹中工務店	中京テレビ放送株式会社	東京海上日動火災保険株式会社	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ株式会社
名古屋トヨペット株式会社	一般社団法人ナゴヤハウジングセンター	西日本電信電話株式会社	株式会社日建設計
パナホーム株式会社	ビジネスコミュニケーション株式会社	株式会社日立製作所	株式会社ファミリーマート
ブリヂストンタイヤジャパン株式会社	三菱電機株式会社	名鉄EIエンジニア株式会社	名鉄環境造園株式会社
名鉄ビルディング管理株式会社	株式会社ローソン		



「明治はるあき　芝居小屋 呉服座」前田守一画 平成7(1995)年

平成30年9月25日発行
「明治村だより」第93号（平成30年 秋）
発　行　博物館明治村 〒484-0000 愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314 http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第94号発行のお知らせ
発行時期　平成30年12月中旬（予定）
申込方法　「明治村だより」第94号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料（含発送手数料）140円とともに現金書留にてお申し込み下さい。

写真1　活版手引き印刷機

鉄道寮新橋工場・機械館内常設展示リニューアル

活版印刷と石版印刷について

明治元年から起算して百五十年を迎える本年、明治から昭和初期にかけて製造された原動機、工作機械、繊維機械、そして印刷機械などの工業機械が展示されている鉄道寮新橋工場・機械館内の常設展示をリニューアルします。リニューアルの内容としては大きく三点あり、①解説パネルの内容更新と英文の追加、②一部工作機械と繊維機械の動きがわかる映像展示の追加、③一部繊維機械を動態展示可能な状態への整備、となります。またこれに加え秋催事期間中には、手引きの印刷機械を使った実演も予定しています。

ここでは、機械館に展示されている活版と石版の二種類の印刷機について、それぞれの印刷方法や特徴などを簡単にご紹介します。

活版印刷（写真1）

活版印刷とは、一字ずつに分かれた「活字」を組み合わせて「活版」を用意し、活字の文字が浮き上がっている凸面にインクを塗り、紙を押圧する印刷方法で、ドイツ人のグーテンベルクによって一四四〇年頃に発明されたとされます。日本には天正一八（一五九〇）年、遣欧少年使節団が帰国した際に、ヨーロッパより持ち帰ったものが、日本で最初の活版印刷機と言われています。その後幕末にかけて、当時唯一公認されていた国際貿易港であった長崎の外国人居留地を通じて外国製の手引き印刷機が持ち込まれますが、江戸時代の印刷物では楷書を崩した文字に絵が添えられものが人気であったことから、活版ではなく木版による印刷が主流でした。明治時代に入り、新聞や雑誌、書籍などが広く人々に親しまれるようになると、紙の両面に印刷できること、活字を組みかえることで文字訂正ができること、そして版自体の耐久性が高いことなど、文字を中心とした出版物においては木版より早く大量に印刷が可能な活版が主流となりました。

印刷のおおまかな流れとしては、文選（原稿に使用されている文字を、活字が収められた棚から拾って、文選箱と呼ばれる木箱に集める作業）、植字（ステッキ（写真2）と呼ばれる金具を使って、活字を組み上げる作業）を経て出来上がった版を印刷機の台に乗せます。版にインクを塗り紙をのせ、レバーを手前に引くことで紙に圧力をかけて版の文字を紙へ印刷します。そのため、活版で印刷された紙の仕上がりは、表面を見ると文字の部分はへこみ、裏側を見るとその部分が盛り上がっています（写真3）。

写真3　明治42（1909）年に活版で印刷された書籍の紙面

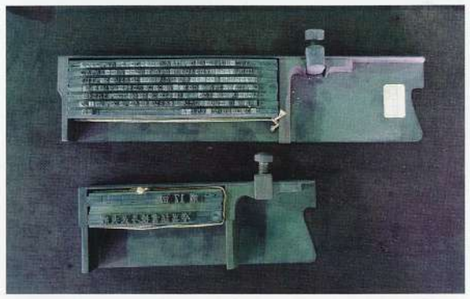


写真2　活字とステッキ

写真4　石版手引き印刷機

石版印刷（写真4）

石版印刷とは、文字や絵が描かれた平らな石の版（写真5）に紙を押圧する印刷方法です。木版や活版のようなデコボコした版ではなく、平らな石の版で水と油の反発作用を利用して印刷します。

まず、石の表面にクレヨンや墨などの油成分を含んだもので絵や文字を描き、そこへ薬品を塗って化学反応を起こさせると、①石の表面の文字や絵が描かれているインクを塗りたい部分は水をはじくようになり、②背景のようにインクを塗りたくない部分は水をはじかなくなります。その結果、表面に水を引いた上で油性のインクをローラーで塗ると、①の部分にはインクが付きますが、②の部分には水分があるためインク油分が反発してインクがつきません。ここへ紙を載せて圧力をかけることで、文字や絵を紙へと写し取ることができます。そのため、石版に用いられる石は、多孔質で保水性の高い石灰石が良いとされ、特にドイツのゾルフォーヘン産のものが最良とされています。

写真5　機械館内に展示されている石版

石版画は、ドイツのゼネフェルダーによって一七九八年に完成された印刷術です。日本への伝来には諸説ありますが、万延元（一八六〇）年にプロシアの使節より、電信機や写真機などとともに、石版印刷機一式を幕府に献上したものが最初とされています。しかし活版印刷同様に、石版印刷が本格的に国内で普及し始めるのは明治時代になってからのことでした。当初石版は、大蔵省で研究目的で行われたり、陸軍では石版印刷で図画の教科書が製作されるなど、一部の官庁のみで用いられていました。しかし、その技術が民間にも普及し始めると、「額絵」と呼ばれる一枚ものの石版画が流行し、名所や風俗、美人画などが印刷されました。明治中期以降になると、雑誌の挿絵や、暦、引札（写真6）といった媒体にも用いられたり、後期には大判石版画のポスターも製作されました。

石版画と同じく明治時代に流行した多色刷りの木版画である錦絵と比べると、錦絵の線による表現に対して（写真7）、描線がそのまま紙へと印刷できるため、絵画のような明暗をつけた立体的で写実的な表現が可能となります（写真8）。また、表面を磨けば同じ石が再利用できることや、木版のように彫るという作業が不要なこともあり、明治時代に隆盛を迎えました。

明治時代に入り、市民の政治への関心が高まったことや、教育制度の普及によって、新聞や雑誌、教科書などの書籍の刊行が盛んになり、大量かつ迅速で正確に出版物を印刷することが求められた結果、活版や石版といった新たな印刷技術が明治時代に普及しました。そしてこうした印刷技術の発展は、人々により多くの情報や知識をもたらすこととなり、科学技術の発展にも繋がっていきました。今回ご紹介した印刷機も含め、機械館の中に展示されている資料は、いずれも日本の近代化を下支えしたものばかりです。改めて明治一五〇年という記念の年に、機械館の資料を通して明治の産業革命をぜひ間近で感じてください。

参考文献

・板倉雅宣『ハンドプレス・手引き印刷機』朗文堂 二〇一一
・岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館 二〇〇九
・狩野晃男『活版印刷の基礎知識』小壺天書房 一九五九
・中部産業遺産研究会『シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第二十二回 明治の機械が語るもの 講演報告資料集』二〇〇四

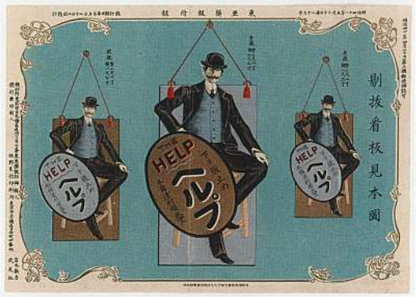


写真6　石版で印刷された薬の広告

写真7　木版で印刷された美人画

写真8　石版で印刷された大阪商船株式会社のポスター

明治村写真コンテスト 紙上展覧会

明治村大賞「ご主人を待つ」小島 康生

特賞 明治のある風景賞
「バスが通るよ」沖 秀夫

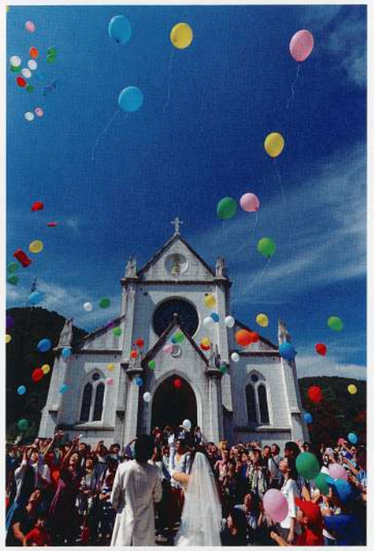
村長賞
「チャレンジ」森 幹雄

（敬称略）

これらの入賞作品は平成30年9月8日（土）～12月16日（日）、
東山梨郡役所2階で展示されます。

入選	明治のある風景賞	「春の窓辺」	鈴木　康二
	鉄ショット	「乗せて錦秋」	塚下　太康
	フェスティバル	「ひと夜の夢」	大江　雅史
	季節のうつろい	「新緑の西郷邸」	髙木　一博
松山・明治体感パートナー賞		「宵の局前」	中村　和夫
		「小雪の日」	齋藤　公久
		「光に願いを」	沖林富士夫
		「ポッポが手を繋ぐよ」	浅野　萌
		「明治を描く」	永宮　正義
協賛会社賞	富士フィルム賞	「監獄の夜空に」	渡邊　和廣
	富士フィルム賞	「新緑の京都市電」	比留木親弘
	富士フィルム賞	「一休み」	前田　憲和
	富士フィルム賞	「若葉の色香につつまれて」	佐藤　和行
	富士フィルム賞	「くつろぎの時間」	服部　哲治
	ハクバ写真産業賞	「お買物」	二村　研次
	ハクバ写真産業賞	「たそがれ」	田中　雄一
	CAPA賞	「東松邸訪問」	武山冨久夫
	CAPA賞	「真っ赤な秋」	大矢　信吾
審査員特別賞		「幻想」	大西　宏徳
		「朱の競演」	亀岡　裕二
		「バスにゆられて春うらら」	上野　仁
		「夢の中」	荒井　雅司
		「春日和の午後」	木村　文理
		「北里研究所の春」	宮本　奈々

特賞 鉄ショット賞
「LOW－techもいいね」武田 英樹



特賞 フェスティバル賞
「晴れの日」堀場 嘉廣

特賞 季節のうつろい賞
「初秋の中で」吉川 徹

明治村写真コンテスト「明治村百景」募集要項

【応募期間】2018年7月1日(日)～2019年6月30日(日)

- テ ー マ：明治村を表す作品
  明治村の四季折々の美しさや賑わい、
  明治村を楽しむ人々の心温まる風景やイベントの様子
- 規　　定：詳細は専用チラシ・HPをご覧下さい
- 締め切り：2019年6月30日（日）（当日消印有効）
- 審　　査：明治村で選考した委員
- 発　　表：2019年8月末までに本人宛に通知
- 表彰式/作品展：2019年秋を予定
- 主　　催：博物館 明治村
- 協賛予定：松山市
  株式会社ビックカメラ
  ハクバ写真産業株式会社
  株式会社学研プラス
- 応募及び問合せ先：〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
  博物館明治村　写真コンテスト係
  電話 0568-67-0314　　FAX 0568-67-0358
- 賞

明治村大賞 …… 1点
・賞金10万円・賞状・賞品
村長賞 …… 1点
・賞金3万円・賞状・賞品

明治のある風景賞（建物や村内の風景をおさめた写真が対象） …… 2点
鉄ショット賞（SLや京都市電など乗り物の写真が対象） …… 2点
フェスティバル賞（村内で開催されたイベントの写真が対象） …… 2点
季節のうつろい賞（季節を感じられる写真が対象） …… 2点
・特賞：賞金2万円・賞状・賞品　・入選：賞金1万円・賞状・賞品（各賞1点づつ）

松山・明治体感パートナー賞 …… 5点
ビックカメラ賞 …… 3点
ハクバ写真産業賞 …… 2点
CAPA賞 …… 2点
審査員特別賞 …… 6点
・賞状・賞品

※賞や賞品等について予告なく変更する場合があります。

明治建築をてらすイルミネーション

きらめき明治村

イルミネーションがはじまったのは「明治時代」。
最新技術と融合し、幻想的な光に包まれる
明治建築をお楽しみください。

2018.11.3(土・祝)〜2019.1.14(月・祝)の土日祝
1.2(水)・3(木)も開催 ※2019.1.1(火・祝)は除く
※開催日により開催会場が異なります。

開催日は
19時30分まで延長開村

※荒天、積雪・凍結等により延長開村中止の場合があります

写真はイメージです。

つり革が革だったころ

●三丁目付近　京都市電

明治村では蒸気機関車と京都市電が動態展示されていますが、今回は京都市電の車内(写真1)に吊られている「つり革」に注目してみたいと思います。つり革は「つり手」とも呼ばれ、バスや電車で立っている乗客が体を支えるためにつかまるものとして、現在も車内に吊られています。しかしつり"革"と言いながら、現在のものにはどこにも革が使用されていません。しかし、かつて本当に革が使われていた時代がありました。

つり革のはじまりは、十九世紀後半にヨーロッパの鉄道馬車内で輪になったベルト状のものや、日本でも江戸時代の駕籠(かご)にぶらさがっていた紐などにさかのぼるとされています。日本の鉄道では、明治四十(一九〇七)年以降に使用されるようになったと言われており、明治四十五年に大阪の汽車製造会社で製造された蒸気動車の車内(写真2)にはつり革状のものが確認できます。

写真1　京都市電車内のつり革

京都市電ではいつごろからつり革が使用されたのでしょうか。残されている古写真をもとに時代をさかのぼってみると、明治二十八年一月三十一日、日本最初の市内電車として開業したその翌日に撮影された写真(写真3)を見ると、車内につり革の存在は確認できません。大正十年頃に撮影された車両(写真4)や、昭和十年頃の車両(写真5)には、いずれもつり革状のものが車内に見受けられることから、少なくとも大正十年頃にはつり革が取り付けられていたようです。ちょうどこの当時は、大正七(一九一八)年の京都市による京都電気鉄道の買収や、隣接町村の吸収合併による市域の拡大、さらに大正十一年に都市計画事業としての路線延伸などによって利用者が増え、車内にはたくさんの乗客であふれていました。そのため、乗客の安全確保が考慮され、京都市電にもつり革が取り付けられることになったと考えられます。

現在のつり革のように、手をかける持ち手部分に別の素材が使われるようになったのは、大正時代に入ってからのことでした。持ち手部分には、木、竹、籐、さらには衛生面に配慮してセルロイドやホウロウ、ベークライトといった様々な材料が用いられますが、ベルト部分は引き続き牛革が使用されていました。

しかし戦後になり、車両のブレーキや加速の性能が高まると、発車・停車時の加速・減速の程度がそれ以前より大きくなったため、つり革のベルト部への負荷も大きくなっていきます。その結果、牛革では強度が不十分ということで、新たに開発された樹脂を浸透させた特殊な繊維のベルトが用いられるようになり、つり革に革が使われなくなっていきました。

つり革は、車内にぶら下がっていることが当たり前で、普段改めて気にすることはありませんが、京都市電に乗車された折には、革が使われたつり革につかまって、その風合いを楽しみながら時間旅行へ出かけてみてはいかがでしょうか。

写真2　蒸気動車内のつり革

参考文献
・京都新聞社編『京都市電物語』京都新聞社 一九七八
・斎藤綾乃「鉄道技術 来し方行く末 吊り手」『RRR』六十九巻十二号 公益財団法人鉄道総合技術研究所 二〇一二
・下野博『京都の市電』株式会社立風書房 一九七八
・読売新聞社編『日本のチンチン電車』読売新聞社 一九七二

建物の性格
～床柱（とこばしら）～

●3丁目27番地　西園寺公望別邸「坐漁荘」
●3丁目31番地　長崎居留地二十五番館
●3丁目32番地　神戸山手西洋人住居
●3丁目68番地　芝川又右衛門邸

西園寺公望別邸「坐漁荘」

博物館明治村三丁目にある西園寺公望別邸「坐漁荘」、長崎居留地二十五番館、神戸山手西洋人住居、芝川又右衛門邸の座敷の床柱をとりあげ、今回は使用されている木材とその加工方法から建物別の床柱選定について紹介したいと思います。

床柱とは、床の間の脇に立て、ほかの柱と樹種や形状などを変えた化粧柱のことです。希少価値のある木、由緒のある木、鑑賞価値の高い木、樹齢の長い木などのいわゆる銘木（めいぼく）を用います。床の間の格式いわゆる「真（しん）・行（ぎょう）・草（そう）」の表現や、美観、意匠性、部屋の大きさや雰囲気との調和を重視しながら選びます。一般的に広間（四畳半以上の部屋）の床に面取りした角柱が用いられ、小間（四畳半より狭い部屋や茶室）には丸材が使用されます。材は樹皮付き丸太「黒木（くろき）」、樹皮を剥いだ丸太「赤木（あかぎ）」、製材され、加工仕上げされた角材「白木（しらき）」の三種類があり、座敷の趣向に合わせて選定されます。明確な境目はないですが「真」は角材、「行」は木目を出した丸太、「草」は自然木を使用する場合がよく見られます。

西園寺公望別邸「坐漁荘」
（建物ガイド時のみ公開）

一階居間の床柱は主張せず、一枚板のマツとの組み合わせでスギ天然絞丸太が用いられ（図1）、二階座敷は手斧（ちょうな）で面に独特の削り痕を残す日本古来からの加工技術「名栗（なぐり）」が施されたアテの出節丸太（図2）が用いられています。二室とも丸太が使用されており、「行」の和室と考えられます。

スギはまっすぐで軽軟、加工性が良く、特有の香りを持っています。年輪の現れ方でいろいろな杢が出るものは装飾的価値が高く、建築用材にヒノキとともに日本で最もよく用いられています。

アテとは、アスナロの変種であるヒノキアスナロです。樹木が山の斜面など特殊な環境によって生じる、傾いた木や曲がった木にできる部分を「陽疾（ようしつあて）」と言います。使用の際に気をつけなくてはならないため、職人の腕前の見せどころだと思われます。

床柱に使われている木材から西園寺公望が生活空間として使用されてきた一階居間と政財界人達への接客空間を伴った二階座敷とで格式の差が伺えます。樹種選別やこだわりのある加工から二階座敷の特別感が見てとれます。

長崎居留地二十五番館
（二〇一九年三月まで修復工事のため、現在非公開）

本館完成から約一〇年後の明治四十三（一九一〇）年、増築された別館の和室にある座敷の床柱にはクワが使用されています（図3）。クワは床柱、床まわりの材として扱われ、加工はやや困難ですが、磨いた仕上げ面に光沢が出るため、銘木として好まれています。この床柱は特徴のある形に仕上げられ、類似の例がなく、外国人の家主と日本職人の要望や技術が融合し、長崎の居留地建築ならではの様式ではないかと考えられます。丸太が使用されたため、「行」の和室と考えられます。

図1　西園寺公望別邸「坐漁荘」　1階居間

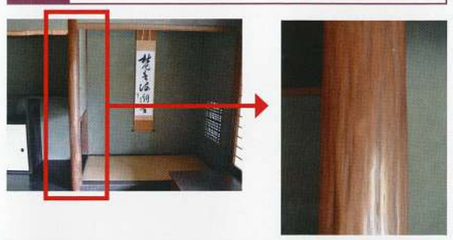


図2　西園寺公望別邸「坐漁荘」　2階座敷

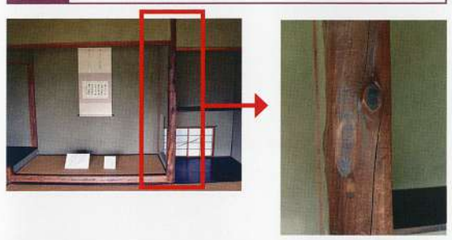
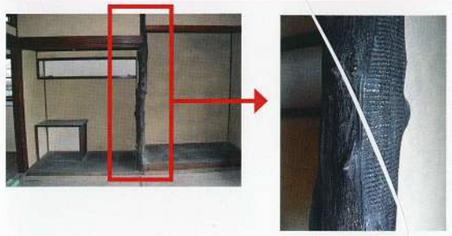


図3　長崎居留地二十五番館　別館座敷



参考文献
・前 久夫『床の間のはなし』鹿島出版会　1988　・宮本茂紀『原色インテリア木材ブック』建築資料研究社　1996
・『床の間』建築資料研究社　1998　・「床の間を知る」淡交別冊62 淡交社　2012
・「茶室に生きる銘木」『なごみ462』淡交社　2018

神戸山手西洋人住居
（ガイド時のみ公開）

付属屋二階座敷にある床柱はアカマツ皮付丸太で（図4）、今回取り上げる建物の中唯一黒木を用いた事例です。アカマツ皮付丸太は小間の茶室の床柱としてよく使われるもので、茶室から変化した「草」の和室と考えられます。この柱のようなアカマツは密生した自然林のなかで、日光が当たらなくなった枝が自然に立ち枯れたものだけを使用するため、非常に希少価値の高いものです。長崎居留地二十五番館と比べ、室内はあまり広い空間ではありませんが、洗練された建物で、家主の趣向が伺えます。

芝川又右衛門邸
（建物ガイド時のみ公開）

二階にある座敷の床柱は南洋木であるビンロウジュ（檳榔樹）の丸太が使用されています（図5）。ビンロウジュは今まで取り上げた材と異なり、マレーシア原産のヤシ科でタケの仲間という変わった木材で、硬く特徴のある胡麻斑が見られます。現在は床柱の材にも使われていますが、当時は一般的に普及している材とは考えにくく、唐物商（輸入業）を家業としていた芝川一族が商売の規模や成果を見せるため使用されると思われます。丸太が使用されたため、「行」の和室と考えられます。

以上四棟の紹介を通し、床柱から建物の格、部屋の役割、住人の性格や歴史が伺えると分かりました。自由にご覧いただけない場所ばかりですが、ぜひ建物のガイドに参加して、それぞれの空間を味わっていただきながら建物の性格、歴史的背景が床柱にどのように反映しているのかを確認してみてはいかがでしょうか。

図4　神戸山手西洋人住居　付属室2階座敷

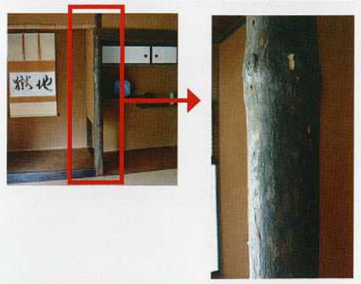
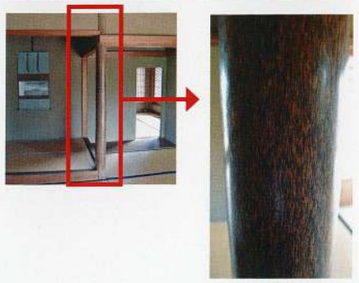



図5　芝川又右衛門邸　2階座敷